

双樹「(ナレーション)

(遠い目をしてあきらめ気味に落ち着いている感じで)
まあ、たしかにき。今日はなあとなく、イヤな予感
はしてたんだよね。

だから正直：学校終わって、裏の仕事に行くのも、ど
うにも気が進まなかったんだけどき。でも、んなこと
言ったって、こっちの都合で「今日はパス」、ってわ
けにも行かねえし。

結局、どーしよーもねえんだよなあ。

(少し間を置いて溜めてから) つつっても、よりによ
って、このタイミングで――

――こんなおっさんに出くわすハメになるなんて思わ
なかったんだけど」

(SE 雑踏っぽいガヤガヤした感じをここから)

常盤「よお。ちよいとそこ行く青少年、足を止めちゃくれね
えか？」

双樹「? ……俺すか？」

常盤「おう。おまえだよ、おまえ。青いおめめのカワイコちゃ
ん、な？」

双樹「何言ってるんすか、あんた。…変質者が出たって、ケー
サツに通報していいすか」

常盤「や、待て。そりゃ困る。つつか、俺がそもそもこーゆー
モンなんだがよ」

(SE 警察手帳を取り出しぱたりと開くような)

双樹「はあ…常盤千歳、警部補つか。いまどき、ソレが本物でも、ぜんぜん信用ならない気がするんすけど。警察官がヤラしい不祥事起こしたとか、よくTVで見るし。むしろ、さっきの今で、正体サラしちまっついていいんすかね？」

常盤「そこまで言うかい。嘆かわしいねえ…一般市民から、そこまで信用されてねえってのァ(わざとらしく嘆いてため息)」

双樹「(常盤に聴こえないようにぼやく感じで) って、テメエのしゃべくりが、信用落としてんだろが」

常盤「ん？ 何か言ったか？」

双樹「いや、何も言ってないっすけど。それより、何か俺に用で？」

常盤「んー、用ってほどじゃねえが、しいて言やァ、職務質問、ってトコかねえ」

双樹「って、何の」

常盤「んー？ ニオイがした、つつたらどうする？」

双樹「だから、何の」

常盤「言っ方がいいのかい？ こんな道端で？」

双樹「(あきれたように) : やっぱ通報していいすか」

常盤「(いきなり、鋭くシリアスに) できるかい? 本当に?
: 俺ア、構わんぜ?」

双樹「(常盤の雰囲気急に変わったことに驚いて息をのむ)」

常盤「その懐に隠してるモン、見せてみな: : とも、言えるんだ
けどな?」

双樹「: 何のコトっすか」

常盤「言わせる気か? (いきなり、からりと軽く) : : ま、あんまり今、つつく気もねえんだけどな。ただな、俺らの世話になっちまうような無体なまねア、ほどほどにしといてもらいてえんでね」

双樹「はあ: : よくわからねえっすけど。気をつけます」

常盤「おう。しっかり気イつけてから色々やりな。俺らとア、なるべく縁ができねえことを祈るがな。: : じゃ、あばよ
青少年」

双樹「(ナレーション)」

(はあ、と息をつき) やっと行ったかよ、あのおっさん。
ん。

ってあれ? たしかこっちの業界の要注意人物の名前で、「常盤」とか前に聞いたことあった気がすんな: :
オイオイ、マジかよ。目エつけられたら、コトじゃねえかよ: : っで今さら思い出しても遅えっつてんだよクソ

ッ…!

(少し間を置いて溜めてから)

とか何とか考えてる間に、ホントに向こう行つたな。

よし。…つたく、ヒヤヒヤさせてくれるぜ。

じゃ、そろそろこつちも切りかえて…(最後、鋭くシ

リアスに) 行くとしようか」

(SE この後、雑踏っぽいガヤガヤした感じのSE
がだんだん大きくなってぷつと切れる感じです)